

第 15 回 政治とワイルド

明治 43 年(1910)5 月の大逆事件の影響もあるが、大正時代に入ると、『近代思想』、『平民主義』、『労働文学』、『改造』、『解放』などが次々と創刊されるようになった。ここでは、日本の社会主義、共産主義の発展状況を見ながらワイルドの 2 つの作品、*The Soul of Man under Socialism* と *Vera: or The Nihilists* の受容状況について触れていきたい。

(1) 社会主義

「美術の個人主義」を抄訳した増田藤之助は早くから政治的関心を持っていたが、何故、*The Soul of Man under Socialism* を取り上げたのかは、推測の域を出ることができない。

自由民権運動は日本の民主主義の原点を刻んだ運動であるが、この民権運動が同時に社会主義と結びついたのである。⁽¹⁾ スローガンとしては国会開設、憲法制度、地租軽減、地方自治、不平等条約撤廃という 5 大要求を掲げて、民主主義的な立憲制国家体制を目指していたが、その根本思想は「自由」と「平等」である。ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)の自由・政体論、ハーバード・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の権利論、ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)の社会契約論などは自由民権思想のよりどころであった。ミルの『自由論』は明治 5 年(1872)に中村正直訳『自由之理』、スペンサーの『社会静学』は明治 14 年～16 年(1881-1883)に松島剛訳『社会平権論』、ルソーの『社会契約論』は明治 15 年(1882)に中江兆民訳『民約訳解』として紹介されている。

「社会主義」という言葉は、文政 10 年(1827)にイギリスのオーエン派の出版物に初めて“Socialism”として登場したと言われている。社会主義の理論的基礎を据えるマルクスの『資本論』(第 1 巻)が公刊されたのは慶應 3 年(1867)のことである。明治 14 年(1881)にはキリスト教雑誌の『六合雑誌』(第 7 号)では小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ス」の中で、マルクス

主義のまとまった紹介が行われている。「社会党」との表記になっているが、英語目次では‘The Cause of Modern Socialism. By the Editor.’とあるように、日本語としては「社会主義」という表記は出現していないが、英語目次より‘Socialism’を訳したことがわかる。その文中には「現今国会請願者中間々過激ノ主義ヲ有スルモノアル」⁽²⁾とあるように、その内容では自由民権運動を意識していることは注目に値する。自由民権運動から、明治 24 年（1891）12 月の『国民之友』（第 139 卷）には徳富蘇峰「平民主義の第一著の勝利」や明治 26 年（1893）7 月の『国民之友』（第 197 卷）には酒井雄三郎『社会問題』と『近世文明』との關繫に就きて」などが発表されている。日本で本格的に社会主義を説いた出版物としては明治 25 年（1892）の斯波貞吉『国家的社会論』がある。その後、村井知至(1861-1944)を会長に、片山潜(1859-1933)、幸徳秋水(1871-1911)らによって明治 31 年（1898）に社会主義研究会が設立、村井知至は明治 32 年（1899）に『社会主義』、幸徳秋水は明治 36 年（1903）に『社会主義神髓』を発表するなど明治 30 年代に入ってからのものであるが、最も象徴的な出来事は、明治 34 年（1901）5 月 18 日に日本最初の社会主義政党を安倍磯雄(1865-1949)、木下尚江(1869-1937)、西川光二郎(1879-1940)、片山潜、幸徳秋水、河上清(1873-1949)が社会民主党として結成するが、5 月 20 日には当局によって禁止されたことである。主唱者 6 名のうち 5 名がキリスト教徒であることも付け加えておきたい。ここでもう一つ取り上げておきたいのは、明治 40 年（1907）3 月の種村宗八編／増田藤之助・佐久間信栄講述『英語講話』（早稲田大学出版部）である。ワイルドへの言及はないが、附録に村井知至「英語研究の心得」が収録されている。さらに同年 4 月には村井知至・岡田市治『英文配語法』（語学協会）、大正 14 年(1925)1 月に村井知至編『英語研究苦心談』（文化生活研究会）、これ以外にも注釈本なども多数出版するなど、英語教育へ力を入れることとなる。村井知至は明治 31 年（1898）に社会主義研究会の会長となった人物である。

(2) 共産主義

「社会主義」と「共産主義」の違いをはっきりさせることがここでの目的ではないが、このふたつの違いに一般的な定義を示しておきたい。「社会主義」と「共産主義」についてまず見ておきたい。『広辞林』には以下のような説明がある。

社会主義〔socialism〕①資本主義の生み出す経済的・社会的諸矛盾を、私有財産制の廃止、生産手段および財産の共有・共同管理によって解消し、平等で調和のとれた社会を実現しようとする思想および運動。共産主義・無政府主義・社会民主主義などを含む広い概念。②マルクス主義において、生産手段の社会的所有が実現され、人々は労働に応じて分配を受けるとされる共産主義の第一段階。⁽³⁾

共産主義〔communism〕①財産の私有を否定し、すべての財産を共有することによって、平等な理想社会をつくろうという理想。ギリシア時代のプラトンあるいはトーマス・モアのユートピアなどにも見られるが、現代では主としてマルクス・エンゲルスにより確立されたマルクス主義思想をさす。②プロレタリア革命によって実現される社会主義の最高の発展段階としての社会体制。そこでは一切の階級は消滅し、生産力の高度の発展によって、人々は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る状態に達しているとされる。③共産主義社会の実現をめざす思想を運動。→科学的社会主義。⁽⁴⁾

「共産主義」が現在と同じ意味で用いられたのはフランソワ・ノエル・ハブーフ (François-Noël Babeuf, 1760・1797) がラテン語で表現した“communis”であると言われている。英語では“communism”であるが、「財産の共有」の思想と言ってよいだろう。ワイルドが目にした考え方もまさにこの点であった。

日本でいつ頃「共産主義」という言葉が誕生したかはわからないが、少なくとも明治15年(1882)12月の大石正己(1855-1935)による『社会改造新論』(第1冊)(大石正己)の目次は以下の内容である。

第一卷 改造論

第一篇 重要ナル社会弊害ノ原因及ヒ結果ヲ論ス

第二篇 社会改造上基本トスル所コノ主義ヲ論ス

第三篇 社会新組織ノ困難有効及ヒ重量並ニ共産主義賛成家ニ対スル告示

第二卷 社会構造比較論即チ第一卷ニ論述シ第二卷復論ス可キ共産論ニ就キ有名ナル社会論家ノ所見ノ符合

第一篇 社会批評論

第二篇 自由平等及友愛ニ関スル共産論ノ本義

第三篇 社会改造

第四篇 結論

附録

大石は自由民権運動家としても知られ、明治16年(1883)1月にはスペンサー／大石正己訳『社会学』(大石正己、土屋忠兵衛)、明治17年(1884)1月～3月にはフランシス・リーベル／大石正己訳『政経：一名・政治道徳学』(第1冊～第3冊)(二大政書出版事務所)を出版している。書名に「共産主義」の表記があるものとしては、大正9年(1920)8月のポール・ルロア・ポーリユー／宮地武夫訳『非共産主義』(佐藤出版部)、大正11年(1922)5月の遠藤友四郎『無政府共産主義の根本批判』(下出書店)、同年の福田徳三『共産宣言の一草稿たるエンゲルス稿共産主義綱領』(同文館)などがある。

(3) *The Soul of Man under Socialism*

The Soul of Man under Socialism の受容については、拙著『書誌から見た日本ワイルド受容研究(明治編)』(イーコン、2007年2月)で触れたが、

明治 24 年(1891)5 月の増田藤之助訳「美術の個人主義」にまで遡ることができる。明治 42 年(1909) 12 月に本間久雄は「現実を離れんとする文藝」(『早稲田文学』第 49 号)の中で、ワイルドの作品中では *De Profundis* が最も価値があると述べているが、『社会主義下に於ける人間の靈魂』(*The Soul of Man under Socialism*) 及び「批評の眞職能」(*The True of Function of Criticism*)の 2 編に注目したとの記述がある。⁽⁵⁾ この評論の中で社会主義とは人間社会を改良することであり、人間の改良は個人主義によるものであり、以後、個人主義の見地に立って芸術論が展開されているのである。本間は純粹に芸術論の立場からワイルドのこの評論を扱っているのである。明治以後は、大正 3 年(1914) 2 月には大杉栄(1887-1981)が中心となった『近代思想』(第 2 巻第 5 号、近代思想社)に荒畑寒村(1887-1981)が「ワイルドの哲学」と題して *The Soul of Man under Socialism* の一文を掲載した。

個人主義は、吾々が社会主義を通じて到達せんとするものであろう。⁽⁶⁾

この一文はワイルドの原文では

Socialism itself will be of value simply because it will lead to Individualism. ⁽⁷⁾

の部分である。荒畑寒村は原文の because 以下だけを紹介したことになる。大正 3 年(1914) 5 月には新田佐逸が「ワイルドの *The Soul of Man* にあらわれたる思想」(『新潮』第 20 巻第 5 号、新潮社)を發表しているが、新田は大正 8 年(1919) 12 月に『現代社会生活の批判』(大同館書店)を出版している。ワイルドへの言及はないものの、「第一章 国家と社会主義運動」とあるように、社会主義を論じている。そして、同月に『新思潮』(第 1 巻 5 号、新思潮社)に皇族とも関係のある近衛文麿(1891-1945)が *The Soul of Man under Socialism* を翻訳して發表したのである。近衛文麿の名前で文章を出

し、活字化された最初のものと言われている。

細川隆元監修／矢部貞治『近衛文麿』では、近衛の京大時代について、西園寺公望(1849-1940)に会ったこととオスカー・ワイルドの *The Soul of Man under Socialism* を訳して発禁になったことが大きく取り上げられている。⁽⁸⁾ 皇室と特別の関係にある最高の貴族出身者が社会主義の思想に惹かれたということは近衛の運命的な生涯を象徴しているとも言える。近衛のワイルドへの関心は一過性のもものではなかったようだ。それは、近衛が自決する直前に読んでいたのが *De Profundis* であったと言う事実もわかっているだけに、近衛がただ単にこの時期に *The Soul of Man under Socialism* を翻訳したと言う以上に、近衛の精神生活にも多大な影響を与えていたということも十分に考えられる。

The Soul of Man under Socialism が翻訳として大きく取り上げられたのは、大正 9 年 (1920) 6 月の本間久雄訳『社会主義と人間の霊魂』(新潮社)、翌月には矢口達監修『ワイルド全集』(第 5 巻、天佑社)の中に収録されたのである。

こうした一連の流れを見ると、大正 9 年 (1920) までは政治的な配慮があったと考えられる。荒畑寒村は幸徳秋水や堺利彦(1870-1933)と同様に社会主義者であり、大正 9 年 (1920) に日本社会主義同盟、大正 11 年 (1922) に日本共産党の創立に参加している。荒畑、新田、近衛の紹介や翻訳は大正 3 年(1914)のことである。この大正 3 年 (1914) は第一次世界大戦が始まった年である。大正 7 年 (1918) にはロシア革命も起きていることから、思想的にもなにやら難しい時期であったと言える。その後、大きく取り上げられたのは、昭和 24 年 (1949) 8 月の木村亀二「文学と社会的背景——オスカー・ワイルドの社会主義」(『表現』第 2 巻第 7 号)である。実際に *The Soul of Man under Socialism* を扱った箇所は後半だけであるが、核心をついている。

ワイルドの社会主義は、モーリスやショーのそれとは根本的に趣きを異にしていたのである。又、ワイルドの社会主義は彼の耽美主義と深く結びつ

き、或る意味では耽美主義の結論であるともいい得る。何となれば、芸術と美をもって最高の表現であり価値であるとするワイルドは、芸術的創造の基礎として個性・人格の価値を最も高いものとするのであって、社会主義は、人間の個性を生かすが故に価値があるのであり、それが到達せんとするのは、個人主義・人格主義の意味におおける個人主義であるからだ。⁽⁹⁾

こうした論文も登場するが、戦後になり、日本が新しい政治体制が落ち着こうとしていた時期であることを考えると、明治から大正の時期の受容時期と同じように政治的な影響を受けていたと思われる。昭和 43 年（1968）7 月にはしもとよしはる訳『社会主義の下での人間の魂』（バルカン社）、昭和 56 年（1981）2 月の西村孝次訳『オスカー・ワイルド全集』（第 4 巻、青土社）の中に『社会主義の下での人間の魂』として収載されたのである。その後新しい翻訳は出ていないものの、全集等に収載された。

The Soul of Man under Socialism の受容状況ということから大正・昭和時代にも踏み込んだが、こうした受容史を見ても、増田藤之助が芸術論として *The Soul of Man under Socialism* を紹介していたことは大きな意味があるのだ。

（4）*Vera, or the Nihilists*

The Soul of Man Under Socialism がそのタイトルに “Socialism” と入っていたために、大正中頃までなかなか翻訳が紹介されなかったことは世情を考えれば理解のできることである。では、*Vera: or The Nihilists*（以降 *Vera* と略す）はどうであろうか。まず、“nihilist”あるいは“nihilism”について考えてみたい。“nihilism”は一般的に「虚無主義」と訳されている。現在の一般的な定義は以下の通りある。

ニヒリズム[nihilism] 真理・価値・超越的なものの実在やその既成の様態をことごとく否定する思想的立場。①一般に無や空を出張する思

想態度。仏教・老荘思想をはじめとして古来から多くの形態がみられる。
②特にヨーロッパ近代社会やキリスト教文明の根底に対する否認の思想。一九世紀後半のロシアの文学思潮・革命思想、ニーチェの哲学などに顕著。虚無主義。⁽¹⁰⁾

ここでは②の定義ということになるろう。Veraは明治44年(1911)11月6日～12月29日にかけて内田魯庵によって「悲劇『革命婦人』」の題名で『東京朝日新聞』に連載された。紹介自体はその前の8月に砂邱子「Oscar Wildeの“Vera”」(『学燈』(第15年第8号、丸善)でなされている。砂邱子とは内田魯庵のことである。さて、Veraの上演はアメリカが初演であった。

1883年8月20日、ニューヨーク市のユニオン・スクエア劇場で、マリー・プレスコット主演で初演されたこの作品は、劇としてワイルドの処女作にあたる。ワイルドはこの作品をその2年も前から計画していたが、ロシア皇帝の突然の暗殺で延期になった。新聞などでの不評も手伝って、公演は1週間で打ち切られた。⁽¹¹⁾

Veraの受容を扱った平成14年(2002)3月の小泉朝子「オスカー・ワイルドの『ヴェラ』——イギリスと日本における作品受容と社会的背景——」(『比較文学』第44巻、日本比較文学会)などもある。小泉の論文にはVeraの状況が簡潔にまとめられている。

日本で『ヴェラ』が最初に紹介されたのは、明治四十四年十一月から十二月にかけて『東京朝日新聞』に掲載された、内田魯庵訳の「悲劇革命婦人」によってである。大正九年に天佑社から刊行された全五巻のワイルド全集、その第四巻に『ヴェラ』として収められた小山内薫の訳が簡潔な原文をそのまま日本語に置き換えている文体であるのに対し、魯庵の訳は、読者にわかりやすく楽しみやすくと考えたのか、講談調の文

体で、原文を補足しながら台詞を加えている点が特徴である。⁽¹²⁾

さらに明治 44 年(1911)の時代状況についても説明している。

明治四十四年といえば、九月に『青鞥』が発行されている。女性の自立という大きな主題が、女性自身の手によって初めて立ち上げられたのがこの年である。『婦人界』『婦人の友』『女学世界』など、女性雑誌広告が新聞の書籍広告面を埋めることが当たり前になっていた。統計では、新聞広告で最も多かった商品は、明治四十一年頃が菓類だったのに対し、四十三年は化粧品が一位だったとされているが、その化粧品広告が必ず小説連載面に掲載されていたことから、『東京朝日』の編集部は女性の小説読者を想定していたことも考えられる。⁽¹³⁾

こうした分析も時代を感じさせるものだ。ところで明治 44 年(1911)は大逆事件が起きて数年しか経過しておらず、「革命」という刺激的な用語の入った題名は挑戦的とも言える。「革命婦人」という表現はすでに明治 38 年(1905)には使用されていたが、内田魯庵が敢えてこの題名をつけてということになるだろうか。

ワイルドの *The Soul of Man under Socialism* は社会主義の基本図書であるとも言われていたと記している本もある。日本の大正時代を社会主義、共産主義という観点から見れば、ワイルドの *The Soul of Man under Socialism* がちょうど時代の求めるものと合っていたということになる。

Vera については、ニヒリズム、ニヒリストあるいは、共産主義といった内容もあるが、「新しい女」との結びつきも無視することができない。しかし、*The Soul of Man under Socialism* と比較すると、日本への定着はあまりなされていない。これには、*Vera* が劇作であることも原因の一つかもしれない。

参考文献

- 本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』第2巻第1号、岩波書店、1934年1月)
- 齋藤繁子「増田藤之助」(『学苑』第10号、昭和女子大学内光葉会、1951年10月)
- 増田綱「増田藤之助」(『英文学』第4号、早稲田大学英文学会、1952年10月)
- 中野重治「大正期の社会主義文学——『近代思想』から『文芸戦線』まで——」(柳田泉他編『座談会 大正文学史』岩波書店、1965年4月)
- 平井博「日本における Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第2分冊、第17号、福島大学学芸学部、1965年10月)
- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)
- 「増田藤之助」(『近代文学研究叢書』第48号、昭和女子大学近代文学研究所、1979年1月)
- 平井博『オスカー・ワイルド考』松柏社、1980年7月
- 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)
- 「社会民主党百年」資料刊行会編『社会主義の誕生——社会民主党100年』論創社、2001年5月
- 佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月)

注

- (1) 堺利彦は『平民新聞』(第8号)の「予は如何にして社会主義者となし乎」の中で「予の社会主義は其根底に於てはやはり自由民権説であり、

ヤハリ儒教であると思ふ」と文章を寄せている。

- (2) 小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ス」(『六合雑誌』第7号、1881年4月)、p.112.
- (3) 『広辞林』(平凡社、1990年4月)、p.1108.
- (4) Ibid., p.632.
- (5) 本間久雄「現実を離れんとする文藝」(『早稲田文学』第49号、1909年12月)、pp.27-30.
- (6) 荒畑寒村「ワイルドの哲学」(『近代思想』第2巻第5号、1914年2月、近代思想社)、p.1.
- (7) *The Complete Works of Oscar Wilde* (Collins, 1990), p.1080.
- (8) 細川隆元監修／矢部貞治『近衛文麿』(日本宰相列伝15、時事通信社、1986年2月)、pp.13-24.
- (9) 木村亀二「文学と社会的背景——オスカー・ワイルドの社会主義」(『表現』第2巻第7号、角川書店、1949年8月)、p.50.
- (10) 『広辞林』、p.1846.
- (11) 三瓶眞弘「『ヴェラ、実は虚無主義者達』」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.542.
- (12) 小泉朝子「オスカー・ワイルドの『ヴェラ』——イギリスと日本における作品受容と社会的背景——」(『比較文学』第44巻、日本比較文学会、2002年3月)、p.24.
- (13) Ibid., p.26.